

世界文学全集 43

ショーロホフ

静かなドン

Ⅱ

世界文学全集 43 ショーロフ II



© 1969

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和35年12月10日 初版発行

昭和44年8月1日 23版発行

定価 430円

訳	者	横	田	瑞	穂
発	行	者	中	島	隆
印	刷	者	草	刈	龍
装	幀	原			弘
印	製	刷・中央精版印刷株式会社			
		本・中央精版印刷株式会社			

発行所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の六 会社

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

静かなドン Ⅱ

第二卷

第四編（つづき）……………五

第五編……………六三

第三卷

第六編……………二七七

「静かなドン」参考地図……………三

歴史略年表……………六二

静かなドン
II

父なるおまえ、榮ある静かなドンよ、

わが養い親なるドン・イワーノヴィチよ、

おまえはほめたたえられていた、

よき言葉もてほめたたえられていた、

おまえの流れは常に速い、と、

おまえの流れは速く、また常に清い、と、

しかるに今、ドンよ、おまえは濁りに濁り、

上流より下流へかけ、すべてこれ濁流となり終わった。

榮あるドンの答えて言うには、

《どうしておれが濁らずにいられよう、

おれはわが子なる美しき鷹どもを、

よき男の子ら——ドンのコサックどもを放ちやった、

いま、わがけわしき岸辺は、これら男の子らをうしなっ

て洗い流され、

これら男の子をうしなつて、砂州は黄色い砂をとかして、

流れを濁らせるのだ》

主要人物

パンテレイ・プロコーフィエヴィチ 典型的なコサック中農メレホフ家の家長。元近衛コサック下士。

イリーニチナ その妻。

ペトロ（ビョートル） その長男。下士から昇進してコサック士官となり、のち白衛軍に投じて戦死。

ダリーヤ ペトロの妻。

グリゴーリー・パンテレエヴィチ（グリーシャ） 次男。

この小説の主人公。コサック士官、革命後、最初赤軍に投じたが、のち反乱軍の有力な指揮官となる。

ナターリヤ（ナターシャ、ナターシカ） その妻。コル

シュエーノフ家の出。双児ミシャートカ（男）とポーリユシカ（女）の母。

ドウニャーシカ パンテレエの娘。ミシカの妻となる。

ミロン・グリゴーリエヴィチ 部落の富農コルシュエーノフ家の家長。赤軍に処刑される。

ルキーニチナ その妻。

ミチカ その長男。コサック兵。のち反乱軍の懲罰隊員。

グリブカ ミロンの末娘。

アクシーニヤ（アクシュエートカ、クシュエーシヤ） メレ

ホフ家の隣りのステパン・アスターホフの妻。この小説の女主人公。グリゴーリーの情婦となり、駆落ちする。

エヴゲーニー・リストニーツキー ドン地方の大地主貴族の息子。白軍将校。一時アクシーニヤを情婦とする。

同僚ゴルチャコフの戦死後、その妻オリガと結婚。

シュトックマン（オーシプ・ダヴィドヴィチ） ポリシエヴィク。のち赤軍の裏切り分子に殺される。

ミシカ・コシエヴォイ 貧農コサック。グリゴーリーの

妹ドウニャーシカの夫。のち部落革命委員会議長。

イワン・アレクセエヴィチ グリゴーリーの幼な友だち。最初の部落革命委員会議長。

ブンチユーク エヴゲーニー・リストニーツキーの隊の

志願兵。ポリシエヴィク。

アンナ・ポグートコ その愛人。赤軍女兵として戦死。

ボドチョールコフ コサック下士官。ドン地方赤衛軍の

最初の組織者。

プローホル・ズイコフ グリゴーリーの忠実な従卒。

ヤコフ・フォミン コサック下士官。赤軍騎兵中隊長。

のち赤軍に反旗をひるがえし、徒党を指揮する。

フリストーニヤ、アニケーシカ 部落のコサック。

クジーノフ・パーヴェル 反乱軍司令官。

第二卷

第四編（つづき）

一五

六月の戦火ですっかり拭いとられて廃墟と化した小さな町、そこから一キロほどへだたった森のそばに奇怪なじぐざぐをなして塹壕がうねっていた。そのいちばん端のところをコサック特別中隊が占拠していた。

うしろははんの木としらかばの若木の、こんもりした緑の林になっていて、その向こうに泥炭の沼が一つ、赤錆びた色を見せていた。戦前にいつか試掘されたものらしかった。野いばらが愉しげに赤い実をつけていた。右よりの、岬のようにつきでた林のさきには、砲弾にうちくずされた舗道が一本ずつと延びて通じていたが、それはまだ人のほとんど通らぬ道のもようであった。林端には、弾丸にかすられた、ひよろひよろのブライヤン草が茂り、焼けた木株がひんまがり、胸櫓が赤土のいろを黄いろく見せていた。塹壕のしわが、遠く裸の野原に延び

つづいていた。うしろの、試掘の跡の点々とした沼、うちこわされた道は、生命のにおい、うちすてられた労働のにおいをかすかに漂わせていたが、林端では——大地はひとびとの目に悲惨なすがたをさらしていた。

その日、もとモホフ蒸気製粉所の機関士であったイワン・アレクセーエヴィチは、第一輜重隊が駐屯している近くの小さな町まで出かけ、夕方ごろやっと帰ってきた。自分の隊の掩蔽壕へむかって歩いているとき、かれはザハール・コロリョーフにばったり出くわした。土囊のくぼみに帯剣をひっかけ、やけに手をふりたくって、ザハールはほとんどかけださんばかりにしてやってきた。イワン・アレクセーエヴィチは道をあけて脇へよけたが、ザハールは彼の作業服のボタンをつかみ、不健康な黄いろい白目をくりくりさせて、ささやきはじめた。

——おい、聞いたかい？ 右側の歩兵のやつら出ていってろぞ！ 戦線をすてる気かもしれんぞ？

まるで黒い鉄を銕たように動かぬ流れになって凍りついているザハールのひげは、あやしくゆれていた。飢えた双つのひとみが悲しみにあふれて貪るように見えていた。

——すてるって、いったいどういうわけ？

——とにかく出ていってことは確かだぜ、委しいわけは、おれにもわからねえが。

——もしかすると交替かも知れねえな？　とにかく小隊長のところへ行ってみることにしよう。

ザハールはひきかえし、湿ってべとべとする地面に足をとられながら、小隊長の壕舎へむかって歩いていった。

一時間後に、中隊は歩兵と交替して、小さな町へ向けて進んでいった。翌朝、厩番から馬をうけとり、強行軍で後方へ移動した。

小雨がふっていた。しら、かばがうつむいて、身をまげていた。道が林のあいだへかかると、馬どもは湿りと、去年の朽葉のするどく佻しいにおいとを嗅いで鼻をならし、うれしそうに脚を早めた。茂みには、つくばね草がばら色のまがい真珠のようにぬれそぼち、つめくさの雨にぬれた綿帽子が、なんともいえぬ白さでかがやいていた。風が騎手たちのうえに大粒の滴を木からはらいおとすと、外套と帽子は、霰弾でうちぬかれたように黒く斑点をつけた。マホルカたばこのとけてゆく煙が小隊の列のうえに漂っていた。

——いきなり引っぱりだしやがってよ、いったいどこへ連れてくつもりだろうな。

——でもよ、塹壕生活あ、もうこりこりだっていったじゃねえか？

——だが全くの話、どこへ連れてかれるのかな？

——編成替えかも知れねえな。

——それでもねえようだぞ。

——おい、みんな、一ぶくやろうぜ、一ぶくやって苦しみをまぎらしちまうだな！

——苦しみはどこまでもついて来やあがるよ……

——大尉殿、歌ってもいいですか？

——お許しがでたんだろ？……やれよ、アルヒーブ！　だれか前のほうにいたのが、咳払いをして歌いはじめた。

勤め終えたるコサツクは、今ぞわが家へ帰りゆく
面の肩には肩章つけ、胸には十字をぶらさげて、

湿った声で、ものうげに合唱をはじめたが、すぐまた黙ってしまった。イワン・アレクセーエヴィチと並んで進んでいたザハール・コロリョーフは、鎧をふんでたちあがり、嘲るようにどなった。

——おい、おまえらの歌は——そりゃいったいなんだな！　そんな歌い方であるのかい？　教会で賽銭を集めるときヘラザロを歌うのとちつともちがわねえぞ。歌っていうものはなあ……

——そんなら、おまえ一つやってみろや！

——猪首だもんで、声の入れ場がねえんだとさ。

——自慢しやがって、いざとなると尻尾をまくのか？
コロリョーフは虱のたかったまっ黒なひげをぎゅつと
つかんで、ちよつと目をつむるようになったが、やがて、
ひとふりはげしく手綱をふって歌いはじめた。

さあ喜べよ、勇ましき、ドンおの男の子よ、コサック
よ……

中隊はあたかも彼の歌ごえによびさまされたように合
唱しはじめた。

おのが名誉と光栄を！——

そして歌ごえは、ぬれそぼった林のうえを、きりひら
かれた林のなかの小径こうのうえを流れていった。

どうして敵は射つものか

みんなに手本を示してやろう！

いくら射っても軍律を、乱すことなく命令の
ままにしたごうものなるぞ。

ただ隊長の命令の、ままにしたがい

進みゆき、——斬って斬って、斬りまくり、突い

て、突いて、射ちまくる！

《おお、お、お、おの墓場》からぬけだしたことを喜びあいなが
ら、全行程ぜんしんていを歌をうたって歩きつづけた。夕方には汽車
へ乗せられた。列車はプスコフへむけて出発した。そし
て三度目の乗りかえをしたのち、はじめて中隊は第三騎
兵軍団の他の部隊といっしょに、始まっている騷擾そうじょうを鎮
圧するためにベトログラードへ向かっているのだという
ことを知った。この話をきくと、みんな黙りこんでしま
った。赤い色の客車の内部にはながいこと仮睡かすいの静けさ
が支配していた。

——いよいよ、ろくでもねえことになってきやがった
ぞ！——のっぽのボルシチョーフが、みんなの思ってい
たことを口にだしていった。

イワン・アレクセーエヴィチは、二月からひきつづい
て中隊の委員会の議長をしていたが、つぎの停車場に着
くとすぐ、中隊長のところへ行った。

——大尉殿、コサックたちが大分心配しているようで
すがね。

大尉は、イワン・アレクセーエヴィチの顎あごのうえの深
いくぼみに、ながいこと目をとめていたが、やがて微笑
しながら、いった。

——おれだっておまえ、心配しているさ。

——どこへ、もって行かれるんでしょうか？

——ペトログラードだ。

——騒ぎを鎮めに？

——おまえは、騒ぎの加勢に行くとも思ったのか？

——むしろは、どっちもいやですなあ。

——おれたちのいうことを、ちゃんと、きいてくれないのだからな。

——コサックたちが……

——何がコサックたちがなもののか？——中隊長はすでに怒気をふくんでさえぎった。——おれにだってコサックたちが何を考えているかは判っているよ。こんどの役割はおれには愉快だろうというのか？ まあ、これを持っていて、中隊で読んでやれ。つぎの停車場でおれが行ってコサックたちによく話すことにしよう。

中隊長は巻かれた電報を渡して顔をしかめた。そして、もうすっかり不きげんな顔になって、罐詰肉の一片を噛みはじめた。

イワン・アレクセーエヴィチは自分の車室へ帰ってきた。手のなかに、まるで燃えている燃えさしのようにして電報をもっていた。

——ほかの車室のコサックたちを呼んできてくれ。

列車はもううごきだしたが、車室のなかへぞくぞくコサックたちがおどりこんできた。三十人ばかり集まった。

——隊長が電報をうけとったんだ。ざっと読んでみたが。

——どんなことが書いてあった？　じゃあ、さっそく読んでみてくれ！

——読んでくれ、まちがえるなよ！

——講和か？

——だまってる！

——しーんと静まりかえったなかで、イワン・アレクセーエヴィチは最高総司令官コルニローフの機を読みあげた。そのあとで、ところどころ電文に打ちちがいのある電報用紙は、次から次へ汗ばんだ手に手渡されていった。

《軍最高総司令官として余、コルニローフは全国民にたいして宣言する。軍人としての義務、自由なるロシアの市民としての自己犠牲心ならびに限りなき愛国心によって、余はいま、この祖国の危急存亡の秋にあたり、臨時政府の命に服従することなく、陸海軍の統帥者としてとどまるにいたった。この決意を、戦線に従軍中のすべての司令官たちによって支持されている余は、ロシア全国民にたいし宣言する。余は最高総司令官の職を免ぜられるよりも、むしろ死をえらぶであろう。ロシア国民の真の子たるの士は、自己の職にたおれ、自己の有する最大のもの——すなわち自己の生命

を祖国にささげるのを常としたのである。勝ちほこれる敵の勝利の進撃にたいし、両都がほとんど無防備の状態にあるという、まことにおそるべき祖国危急のさいにあたり、臨時政府は、国そのものの存立という大問題を忘れて、国民に反革命なる幻の恐怖を植えつけようとし、しかも政府みずからの政治的無能力と権力の薄弱さと行動における不決断とによって、この恐怖を急速に実現しつつある。自己の国民の血をわけた息子である余としては、——万人の目の前で国民へのかぎりなき奉仕のために自己の生涯をささげてきた余としては、——自己の国民の偉大なる将来の、偉大なる自由の護り手として起たざるをえないのである。しかるにいま、この将来を握っているのは、無力にして無意志なる者たちである。おごれる敵は、買収と裏切りとを手段として勝手気ままにふるまい、ひとり自由のみならずロシア国民の存在すらも破滅に導かんとしつつある。目ざめよ、ロシアのひとびと、しかして見よ、われらの祖国がいままさに突き進まんとしている底いなき深淵を！

あらゆる動揺を回避し、ロシアにおけるいかなる流血の惨事、すなわち内乱にも警告をあたえつつ、かついっさいの侮辱侮蔑とを意に介することなく、余は国民の眼前において臨時政府に向かっていう。わが本営

に來たり投ぜよ、しからば諸君の自由と安全とは誓つて余が保証するであらう。しかして余と協力して国防組織を完備せよ、しからばそれは自由を確保しつつ、ロシア国民を、偉大なる將來へむかつて、力づき自由の國民にふさわしき將來へむかつて、導くにいたるであらう。コルニーロフ將軍」

つぎの駅で列車は停車した。發車を待つ間、コサックたちは客車のそばに集まってコルニーロフの電報と中隊長がいま読みあげたばかりのケレンスキーの電報とを審議しあった。ケレンスキーの電報は、コルニーロフを裏切り者であり反革命者であると宣言したものであった。コサックたちは迷ったような顔をして話しあっていた。中隊長と小隊付士官たちも混乱していた。

——すっかり頭がこんぐらかちまっただ。——と、マルチン・シャミリがこぼした。——どっちがわりいんだか見当がつかねえや！

——勝手に喧嘩しておきやがって、軍隊にまでけしかけてけつかる。

——長官は脂ぶとりで氣がふれただ。

——みんなが自分をえれえ者にしたがっているんだぜ。

——だんなたちが喧嘩すると、コサックたちの前髪が

ゆらぐってわけよ。

——まるでごちゃごちゃだな……困ったことだよ！

ひとかたまりのコサックたちはイワン・アレクセーエヴィチのところへきて要求した。

——中隊長のところへ行って、どうしたらいいのか、きいてきてくれや。

いっしょにかたまって中隊長のところへ出かけていった。士官たちは自分らの車室に集まって、何か相談しあっていた。イワン・アレクセーエヴィチは車室のなかへはいっていった。

——中隊長殿、コサックたちがどうしたらいいか聞きたがっています。

——いますぐ行く。

中隊は最後尾の車室のそばに集まって待っていた。隊長はコサックたちの群れへはいってくると、まんなかへすすみでて、片手をあげた。

——われわれは、ケレンスキーには従わない。最高総司令官と、自分の直属する上官の命令に従うことにする。よろしいか？ したがって、われわれは自分の上官の命令に絶対服従してペトログラードへ行かなくちゃならん。すくなくともドゥノー駅まで行けば、第一ドン師団長のところで状況の説明がしてもらえらると思うので、そうすれば事情がはっきりすると思える。自分はコサッ

ク諸君に動揺せんようにお願いしておく。とにかく、われわれはいま、非常な事態に遭遇しておるわけであるから。

中隊長はそれからまだ、ながながと軍人の義務や、祖国や、革命についてお談義をし、コサックたちをなだめて、肝腎の質問を外らしてしまつた。かれは目的を達した。そのあいだに列車に機関車が連結された。(コサックたちは、中隊の士官がふたりで駅長を武器でおどかし急いで発車させるのに成功したのを知らなかつた)そしてコサックたちは、めいめい自分の車室に帰つていった。

列車は一昼夜のあいだ、ドゥノー駅をめざしてすすんでいった。夜になってふたたび停車させられ、ウッスリ一部隊とダゲスタン連隊をのせた列車を先へ通過させた。コサックたちの列車は待避線へうつされた。その横を、オパール色の夜の闇のなかを、窓の灯をちらつかせてダゲスタン連隊をのせた列車が走りさつて行つた。遠ざかつてゆく咽喉にかかつた話し声、コーカサス管楽器のひびき、耳なれぬ歌のメロディがきこえていた。

中隊をのせた列車が発車したのは、もう真夜中すぎであつた。馬力のない機関車は、ながいあいだタンク(給水槽)のそばに停つたままで、さかんに釜を焚きこんでいるらしく火花を地面に散らしていた。機関士はたばこ

の火をちらつかせながら、何かを待つように、窓の外をのぞきのぞきしていた。機関車に近い車室にいたコサックのひとり、昇降口から顔をつきだしてどなった。

——やい、ガヴリーラ、早く出せ、出さねえと射つぞ！

機関士は巻たばこをぶいと吐きすてたが、それがゆるく弧をえがいて落ちてゆくのを目で追っていたらしく、しばらく黙っていた。それから咳せきばらいをして、いった。

——そうそうみんなを射ちころしちまうわけにもゆくめえぜ。——そして、窓から首をひっこめた。

それから数分たって、機関車は車両をぐいと引っぱった。緩衝機かんしゅうきがちやりと鳴り、衝撃で平均をうしなつた馬がごとと足音をたてた。列車はタンク（給水槽）のわきを、四角な窓がぼつりぼつり灯をとぼしているわきを、線路の向こうのまっ黒なしらかばの木立こだちのわきを、ゆっくり通りすぎていった。コサックたちは馬に飼料かいりょうをやると寝てしまった。ただ三人だけが起きていて、戸の半開きになった昇降口でたばこをすったり、莊嚴そうごんな夜空へ目をやったり、家族のことを思いふけたりしていた。

イワン・アレクセーエヴィチは、コロリョーフとならんで寝ながら、扉のすきまをもれて流れさる星空をなが

めていた。今日一日のうちに起こったことを残らず頭にうかべてみて、かれは中隊がこのままペトログラードへ進んでゆくのを、なんとかしてひきとめねばならぬとかたく決心した。じつと横になったまま、どうして、コサックたちを自分のこの決心に近づけるか、どういうふう

に彼らに働きかけたらよいかを考えているのであった。まだコルニーロフの呼びかけが出ない前からかれは、コサックはコルニーロフと同じ道を進むべきではないということをはっきりと意識していた。また直観は彼にケレンスキーをも擁護ようごすべきでないこともささやいていた。そこでいろいろ頭をひねってみたうえで、こう決めた。中隊をペトログラードへやってはならぬ。そしてもしどちらかと衝突せねばならぬ場合、それはコルニーロフとだが、しかし、それもケレンスキーをまもるためではなく、彼の政府に味方するわけではなく、その後にくるもののためなのだ。ケレンスキーがたおれたのちにこそ、真に望ましい自分たちの政府ができるのだ。——かれは、それを確信したのであった。この夏かれは、中隊長とのあいだに起きたいざこざについて意見をきくために、中隊から派遣されてペトログラードの執行委員会軍事部へ行ったことがあったが、そこで執行委員会の仕事ぶりを眼まなこのあたりに見、二三のポリシェヴィキの同志たちとも話しあってみて、思ったのであった。この骨

組にわれわれ労働者の肉がつく、——そうすると政府ができあがるのだ！ イワンよ、死んでもそれからならぬ、子供が母親の乳房にすがるように、しっかりそれにすがりつくのだ！」

その夜、馬衣のうえに横になって、いつもよりもよいに、しかもいままでない大きな、はげしい愛情をもっていると思いだされたのは、自分が指導をうけて自分のけわしい進路をさぐりあてることになった、その人のことであつた。明日コサックたちにいい聞かせねばならぬことを思案しながら、シュトックマンがコサックについて述べたことを、かれはふと思ひだした。かれはその言葉を頭へたたきこむように、たびたびくりかえした、《コサックの民はその本質において保守的なのだ。きみがボリシエヴィキーの思想の正しさをコサックに説く場合、——このことを忘れてはいけない。注意して、いろいろ考えてみたうえで働きかけるのだ。その場の事情にびつたりあうようにすることが大事だ。さいしょのうちはちやうどきみやミシカ・コシエヴォイが、ぼくにたいして抱いたと同じような偏見を、きみも相手からもたれるだろうが、それに参ってしまわないようにすることだ。あくまでやってみるんだね、そうすれば最後にはこちらが勝つのだ》

イワン・アレクセーエヴィチは、コルニーロフに味方

すべきでないとコサックたちに説けば、きつと二三の者から反対がでることを予期していた。ところが翌朝、自分の車室で、戦線へ引きかえすことを要求すべきで、ペトログラードへ行つて味方と戦うべきでないと、用心しながらいい出してみると、コサックたちは進んでこれに賛成し、さっそく、このままペトログラードへ向かつて行くのを拒否する決議をしたのである。ザハール・コロリョフとチエルヌイシエーフスカヤ村の出身のコサック、トゥリリンがイワン・アレクセーエヴィチの最も心の許せる連絡係りになった。かれらは一日じゅう、車室から車室をわたりあるいてコサックたちと話しあつた。夕方ちかく、ある待避駅で列車が速度をおとしたとき、イワン・アレクセーエヴィチのいた車室へ第三小隊の下士ブシエニチニコフがとびこんできた。

——こんど停つたら、さっそく降車だぞ！——かれはイワン・アレクセーエヴィチにむかつて興奮してどなつた。——コサックたちが何を欲しているかも知らねえで、おまえは委員会の議長といえるか？ おらたちのところじゃ、もう騒ぎがおっぱじまりそうなんだぞ！ これ以上乗っていくことはまっぴらだ！ 将校たちはおらたちの首に活索をかけようとしているんだぞ、それにおまえはまだぐうともすうともいわねえじゃねえか。こんな目にあうために、おまえを選挙したとも思っている

のか？ おい、何をにやにやしてけつかるんだ。

——そう言うてくるのを待ってたんだ。——イワン・アレクセーエヴィチは笑顔で、いった。

汽車がとまると、かれはまっ先に車室からとびおりた。トゥリリンをつれて駅長のところへ行った。

——列車を発車させねえようにしてくれ。おれたちはここで降車することになっただから。

——どうしてまた？——駅長は、とりみだしてきいた。——こちらは命令をうけてるんだが……証明書は……

——よけいな口をきくくない！——トゥリリンは、きびしく彼をさえぎった。

かれらは停車場委員会の者をさがし、肥^ふっていて赤い髪をした電信係りの議長に事情を説明した。数分たつと、電信係りは進んで列車を待避線へひきいれてしまった。

大いそぎで板をかけわたすと、コサックたちは車両から馬どもを降車させはじめた。イワン・アレクセーエヴィチは機関車のそばに立って、長い足をしつかとふんまえ、微笑をたたえた浅ぐろい顔の汗をぬぐっていた。中隊長が顔いろをまっ青にして彼のところへやってきた。

——きさま、いったい、どうしようというんだ？ きさまにはわかつとるはずなのに……

——わかつとるよ！——イワン・アレクセーエヴィチ

は、さえぎっていった。——大尉、まあそう騒ぎたてるなよ。——血相^{けつさう}を変え、鼻孔^{びく}をびくびくさせ、きっぱりといった。——おい、若僧、さわぎたてるのはもうたくさんだ！——こんどはおまえたちの番だぞ。わかったか！

——コルニローフ最高総司令官が……——大尉はまっ赤になり、いいかけて口ごもった。イワン・アレクセーエヴィチは、もろい砂のなかへ深くはまりこんでいる、穿^はきふるされた自分の長靴へ目をやりながら、これで、荷をおろしたというように手をふって、いった。

——てめえたちにはありがたいかしらんがね、おれたちにとっちゃ、やつあ用はねえんだ。

大尉はくるりと踵^{くびす}をかえして、いそぎ足で自分の車室へ帰っていった。

一時間後には中隊はひとりの士官もなしに、しかし、完全に戦闘隊形をとり、南西の方向をさして停車場を出発した。先頭小隊には、中隊の指導をひきうけたイワン・アレクセーエヴィチと、彼の副官格の、背がひくくて垂^たれ耳のトゥリリンとが機関銃兵とならんで進んでいた。

元^{もと}の中隊長から取りあげた地図をたよりに中隊はやつとゴレロエ村にまでたどりつき、そこで夜営することにした。みんなで協議した結果、戦線へ引返すこと、もしそれを阻止された場合には——一戦まじえることに決めた。